

平成25年7月8日

各 位

公益財団法人 大同生命国際文化基金

2013年度（第28回）大同生命地域研究賞
受賞者の決定および贈呈式の開催

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：喜田哲弘）では、標題の研究賞について、本年度の受賞者を下記のとおり決定いたしました。

つきましては、贈呈式を開催いたしますのでお知らせいたします。なお、受賞者ならびにこの賞に関する資料を添付いたしますのでご覧ください。

記

1. 贈呈式

日時：平成25年7月12日（金）午後2時～

場所：一般社団法人 クラブ関西

大阪市北区堂島浜1-3-11 電話：06（6341）5031

2. 受賞者

1) 大同生命地域研究賞（副賞300万円ならびに記念品）

国立民族学博物館名誉教授 田辺 繁治 氏

2) 大同生命地域研究奨励賞（副賞100万円ならびに記念品）

東京大学東洋文化研究所准教授 佐藤 仁 氏

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授
権野 若菜 氏

3) 大同生命地域研究特別賞（副賞100万円ならびに記念品）

龍谷大学名誉教授、人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー
特定非営利活動法人JIPPO専務理事 中村 尚司 氏

以上

照会先：公益財団法人大同生命国際文化基金 事務局（北迫）
電話 06（6447）6357 / Fax 06（6447）6384

大同生命地域研究賞について

1. この賞を設けた趣旨

大同生命国際文化基金は、大同生命保険相互会社(当時)の創業80周年記念事業として、外務大臣の認可により1985年3月に設立された財団法人であります。その目的は「国際的相互理解の促進に寄与する」こととし、そのためいくつかの事業を行ってきました。

この賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、様々な地域の人と文化に対する理解を究極の目的としている点で、本財団の設立目的と一致します。それはいわば国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担うもので、医学に例えれば臨床医学に対する基礎医学のような関係にあたります。こうした理解に立ち、関係学界の協力を得て、この賞を創設しました。

2. 賞の内容

この賞は、次の3部門で構成されています。

(1) 大同生命地域研究賞

多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名に対して、賞状、副賞300万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(2) 大同生命地域研究奨励賞

地域研究の分野において新しい展開を試みた研究者2名(地域研究賞の該当者がいない場合、3名とすることも可)に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(3) 大同生命地域研究特別賞

対象地域を通じて、国際親善、国際貢献を深める上で功労のあった者1名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

3. 選考

- (1) 選考については、本財団が委嘱する選考委員で構成する会議により決定されます。
2013年度の選考委員は次の5名です。

(五十音順)

総合地球環境学研究所名誉教授	秋道 智彌 氏
日本女子大学文学部教授	臼杵 陽 氏
一般財団法人自然環境研究センター理事長	大塚 柳太郎 氏
国立民族学博物館教授	小長谷 有紀 氏
政策研究大学院大学教授	原 洋之介 氏

- (2) 候補者の推薦については、全国の大学、研究機関等の研究者に推薦委員を委嘱し、推薦委員より書面による推薦を受けることを原則としています。

以上

2013年度

大同生命地域研究賞受賞者一覧

◆大同生命地域研究賞 (副賞300万円ならびに記念品)

「北タイを中心とする地域研究とその理論化に関する貢献」に対して

国立民族学博物館名誉教授 たなべ しげはる
田辺 繁治 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「人々の生存基盤としての資源論の確立を目指した相関的地域研究」
に対して

東京大学東洋文化研究所准教授 さとう じん
佐藤 仁 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「ケニア・ルオ族のジェンダー論・生活誌・社会誌の相関・統合研究」
に対して

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授
しいの わかな
椎野 若菜 氏

◆大同生命地域研究特別賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「南アジアにおける地域自立の経済学研究と広汎な啓発活動への貢献」
に対して

龍谷大学名誉教授、人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー
特定非営利活動法人JIPPO専務理事 なかむら ひさし
中村 尚司 氏

2013年度
大同生命地域研究賞

田辺 繁治 氏
(国立民族学博物館 名誉教授)

略 歴

田辺 繁治(たなべ しげはる)

1. 現 職 : 国立民族学博物館 名誉教授
〔勤務先電話番号 06 (6876) 2151〕
 2. 最終学歴 : ロンドン大学大学院東洋アフリカ研究学院博士課程修了 (1981年)
 3. 主要職歴 : 1974年 国立民族学博物館助手
1978年 国立民族学博物館助教授
1993年 国立民族学博物館教授
2004年 大谷大学文学部教授
2009年 同上退職
現在に至る
 4. 主な著書・論文:
 - ①『精霊の人類学—北タイにおける共同性のポリティクス』〔岩波書店, 2013〕
 - ②『北タイ農民社会における儀礼と実践』(タイ語)〔Chiang Mai: Center for Ethnic Studies and Development, Chiang Mai University, 2012〕
 - ③『「生」の人類学』〔岩波書店, 2010〕
 - ④『ケアのコミュニティ—北タイのエイズ自助グループが切り開くもの』〔岩波書店, 2008〕
 - ⑤『コミュニティと統治性—北タイにおける HIV 感染者グループ』(タイ語)〔Bangkok: Sirindhorn Anthropology Centre, 2008〕
 - ⑥Imagining Communities in Thailand: Ethnographic Approaches (ed.)〔Chiang Mai: Mekong Press & Seattle: University of Washington Press, 2008〕
 - ⑦『社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティ』(西井凉子と共編著)〔世界思想社, 2006〕
 - ⑧『黄衣と黒衣—北部タイにおける農民指導者の物語』(タイ語)〔Bangkok: Chulalongkorn University Press, 2004/1986〕
 - ⑨『生き方の人類学—実践とは何か』〔講談社現代新書, 2003〕
 - ⑩『日常の実践のエスノグラフィ—語り・コミュニティ・アイデンティティ』(松田素二と共編著)〔世界思想社, 2002〕
 - ⑪Cultural Crisis and Social Memory: Modernity and Identity in Thailand and Laos (co-ed. with C.F. Keyes)〔London: Routledge/Curzon, 2002〕
 - ⑫『アジアにおける宗教の再生—宗教的経験のポリティクス』(編著)〔京都大学学術出版会, 1995〕
 - ⑬Ecology and Practical Technology: Peasant Farming Systems in Thailand〔Bangkok: White Lotus, 1994〕
 - ⑭『実践宗教の人類学—上座部仏教の世界』(編著)〔京都大学学術出版会, 1993〕
 - ⑮『人類学的認識の冒険—イデオロギーとプラクティス』(編著)〔同文館出版, 1989〕
 - ⑯History and Peasant Consciousness in South East Asia, Senri Ethnological Studies, No.13, (co-ed. with A. Turton)〔Osaka: National Museum of Ethnology, 1984〕
- 以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
5. 備 考 : 1981年 Ph.D. (ロンドン大学)

業績紹介

「北タイを中心とする地域研究とその理論化に関する貢献」に対して

紹介者： 小長谷 有紀

(国立民族学博物館 教授)

田辺繁治氏は、1960年代からタイにおける文化人類学的研究を開始し、長年にわたり、日本におけるタイ研究を推進してこられた。氏の研究は、綿密な現地調査にもとづく実証的な研究であると同時に、すぐれて理論的である点で、地域研究の発展に大きく貢献され、今日なおその貢献は続いている。

氏は当初、稲作農耕技術に関する民族誌的研究をおこない、その成果は1978年に第9回澁澤賞を受けるなど早くから評価されていた。のちに、タイ北部のチェンマイ地方と中部のアユタヤ地方の稲作農耕技術に関する比較研究をおこない、1981年、ロンドン大学で学位を取得した。それに基づく著書も、のちに出版されている (*Ecology and Practical Technology: Peasant Farming Systems in Thailand*, 1994年、*White Lotus*)。

1980年代にはいると、氏の関心は、稲作農耕儀礼だけでなく仏教儀礼や守護霊儀礼など人びとの生活をおおう多くの儀礼へと拡大し、とりわけ精霊の儀礼に集中してゆく。北タイおよびラオスの人びとは、上座部仏教を信奉すると同時に、「ピー」とよばれる精霊の存在を信じている。精霊は人間に危害をおよぼすが、また逆に守護するという両義性を備えると考えられている。それゆえ、病気を治療し、心身の不調を解消するためにさまざまな精霊儀礼をとりおこなう。こうした儀礼の実態を詳細に調査し、新たな共同性のダイナミズムを以下のように明らかにしてみせた。

まず、北タイの伝統的な社会では、儀礼において精霊たちは供養され守護的な力に転換されることによって、現存する社会的秩序が追認される一方、参加者のあいだの共同性がはぐくまれる。こうした精霊儀礼のメカニズムは、社会が変容し、近代性が拡大するなかでも持続するが、そこでは伝統的な社会とは違った新たな共同性をうみだしていく。このように、精霊および精霊儀礼が社会の基層となっていることを「共同性のポリティクス」として分析した。

近年の社会変動のなかでは、都市部はもとより、地方においても村のようなコミュニティは衰退し、もはや人びとは個々人へと解体されている。氏はそこに勃興する職業的な霊媒たちのカルトに注目することによって、伝統的な儀礼の形式や言説を継承しながらも、従来のコミュニティ、社会関係や男女の性的区別も超えた、新しい共同性がうま

れつつあることを見いだした。すなわち、病気治療や運勢占いなどをおこなう霊媒たちは、精霊儀礼の実践的な知を継承しながら患者やクライアントたちの苦痛や苦悩を緩和し、問題の解消を手助けしているのである。都市のなかでバラバラに生きる霊媒や患者、クライアントたちは情動的に交流しあう場においてたがいに結びつく新たな共同性をつくりあげている、と明らかにした。

このように地方と都市、および伝統と近代性との違いを明らかにしながら、いずれにおいても、不安や苦痛を媒介にして成立している共同性を分析している点に、氏の研究の真骨頂がある（『精霊の人類学』2013年、岩波書店）。1990年代から開始された、HIV感染者自助グループに関する研究は、同じく、苦しみを共有しながら実践する新たなコミュニティを対象とするものである。そこにおいても身体化された知識が共有、継承され、新たな共同性が生成されていく過程が明らかにされた（『ケアのコミュニティ-北タイのエイズ自助グループが切り開くもの』2008年、岩波書店）。「ケア」をめぐる人類学的研究の日本における嚆矢であるといえよう。

こうした研究は、タイに関する地域研究の新たな局面を開拓したものである。と同時に、地域研究を超えて、普遍的に、人間に関する新しい知見をもたらすものでもある。そこで、氏はこの普遍性について、人びとの「生」そのものにアプローチする「実践」の人類学として理論的に整備した（『「生」の人類学』2010年、岩波書店）。

また、以上のような研究成果は、日本語のみならず、英語やタイ語で国際的に発信されている。また、社会的に普遍化すべく一般書の刊行にも取り組まれている（『生き方の人類学—実践とは何か』2003年、講談社現代新書）。こうした成果により、2008年に第3回日本文化人類学会賞を受けている。

以上のように、地域研究としてきわめてオリジナリティが高く、理論化、国際化、一般化の側面も兼ね備え、地域研究に対する貢献は群をぬいており、本賞を授与するにふさわしいと、選考委員会において決定された。

2013年度
大同生命地域研究奨励賞

佐藤 仁 氏
(東京大学 東洋文化研究所 准教授)

略 歴

佐藤 仁(さとう じん)

1. 現 職 : 東京大学東洋文化研究所新世代アジア研究部門・准教授
〔勤務先電話番号 03 (5841) 5873〕
 2. 最終学歴 : 東京大学大学院総合文化研究科博士課程 (西暦 1998 年修了)
 3. 主要職歴 : 1998 年 日本学術振興会特別研究員 (PD)採用
1998 年 イェール大学 Program in Agrarian Studies, Post-Doctoral Fellow
1999 年 東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻助手
2000 年 同大学 助教授
2004 年 タイ政府天然資源環境省政策アドバイザー (JICA 個別派遣専門家)
2009 年 東京大学東洋文化研究所汎アジア部門准教授
2010 年 プリンストン大学 Democracy and Development Fellow (フルブライト研究員)
2011 年 東京大学東洋文化研究所新世代アジア研究部門准教授
現在に至る
 4. 主な著書・論文
 - ① Governance of Natural Resources: Uncovering the Social Purpose of Materials in Nature. (Jin Sato, ed.) [United Nations University Press, 2013]
 - ② 「近代化と統治の文化—明治日本とシャムの天然資源管理」 (平野健一郎ほか編) 『国際文化関係史研究』 [東京大学出版会, 2013] pp.171-192
 - ③ The Rise of Asian Donors: Japan's Impact on the Evolution of Emerging Donors. (Jin Sato and Yasutami Shimomura, eds.) [Routledge, 2012]
 - ④ 「戦後日本の対外経済協力と国内事情—原料確保をめぐる国内政策と対外政策の連続と断絶」 『アジア経済』 第 53 巻第 4 号 [2012] pp.94-112.
 - ⑤ "Emerging Donors" from a Recipient Perspective: An Institutional Analysis of Foreign Aid in Cambodia", Jin Sato, Hiroaki Shiga, Takaaki Kobayashi, Hisahiro Kondoh [World Development. Vol.39, No. 12, 2011] pp.2091-2104.
 - ⑥ 『「持たざる国」の資源論—持続可能な国土をめぐるもう一つの知』 [東京大学出版会, 2011]
 - ⑦ "Matching Goods and People: Aid and Human Security After the 2004 Tsunami" [Development in Practice Vol. 20, No. 1, 2010] pp.70-84.
 - ⑧ 「環境問題と知のガバナンス—経験の無力化と暗黙知の回復」 『環境社会学研究』 第 15 号 [2009] pp. 39-53.
 - ⑨ 「問題を切り取る視点—環境問題とフレーミングの政治学」 石弘之 編 『環境学の技法』 [東京大学出版会, 2002] pp.41-75.
 - ⑩ 『稀少資源のポリティクス—タイ農村にみる開発と環境のはざま』 [東京大学出版会, 2002]
- 以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
5. 備 考 : 1998 年 学術博士 (東京大学)

業績紹介

「人々の生存基盤としての資源論の確立を目指した相関的地域研究」に対して

紹介者： 原 洋之介

(政策研究大学院大学 特別教授)

タイの少数民族が暮らす地域で、かれら森の人々が森林をどう生活に利用しかつその枯渇を避けるためにどういう管理の仕組みを発達させてきたのかを、フィールド調査で克明に観察し分析する。その成果をまとめ上げた博士論文を拡充して『稀少資源のポリテクス—タイ農村にみる開発と環境のはざま』*1 を上梓した。そこで、ローカル、ナショナル、グローバルというそれぞれのレベルにおいて顕在化してきた希少性の差異によって、資源管理のあり方が規定されるとともに、住民を資源から排除することにもなることを明らかにしている。「ポリテクス・エコロジー」とも呼ばれるこの研究が佐藤氏の地域研究の出発点となった。

それ以降の研究を少し紹介しておこう。ミャンマー、ラオス等からの研究者との共同研究を組織し、国境を越えて広がる森林資源管理の問題の解明をおこない、その成果を英文編著 *Transboundary Resources and Environment in Mainland Southeast Asia**2 として公刊している。また、高度経済成長を実現させてきた東南アジア地域では氏が研究対象として付き合いきた森の人々は「貧困層」となっている。この貧困化の要因に関して、氏が研究指導を受けたことのあるノーベル経済学賞を受賞した A. K. センが強調している、人々がどういう財や資産の利用に権原エンタイトルメントをもっているかという論点に焦点をあてて解明するべきことを提唱している（「貧しい人々は何をもっているか—展開する貧困問題への視座」*3）。

以上のような森林などの資源の利用・管理の研究のまとめとして、「現場における人々の工夫や総合の実践を拾いあげ、それらを国境を越えて縦横無尽につなぎながら励ますような知的営為」としての「人々の資源論」の構築が必須であることを強調している（『人々の資源論—開発と環境の統合に向けて』*4）。森の人々の集落でのフィールド調査、資源管理に関する行政学的アプローチと貧困分析のための経済学的アプローチ、多様な地域間の比較研究。こういった多角的なアプローチを「相関」させるというのが、佐藤氏の地域研究の基本的姿勢となっているのである。

さらに、森林といったローカル・コモンズを越えて、我々人間の生活の維持・拡大にとって必要とされる自然が産み出した、通常「資源」と呼ばれている様々な有用物に研究対象を広げ、その利用・管理の仕組みの解明をおこなっている。その一環として、我が国での「資源」論の歴史を公文書館に保存されている資料調査を踏まえて解明する仕

事を完成させている。たとえば、資源といった概念の普及に戦前の軍が重要な役割を果たしたことや、1941年に設置された南方資源研究会の活動を通じて東京帝国大学の教官が東南アジアの資源調査に深くかかわっていたこと。こういったことに、戦後日本の政府関係者が資源問題をどう考えそれに取り組んできたかという歴史を整理した『「持たざる国」の資源論—持続可能な国土をめぐるもう一つの知』*5 を世に問うている。また、こういう作業をふまえて日本と東南アジア諸国の資源管理を比較する試みにも取り組んでいる。その成果が「近代化と統治の分化—明治日本とシヤムの天然資源管理—」*6 である。氏の研究に、歴史、比較史といった分野も付け加わってきているのである。

以上のような研究の中核とは、少し毛色が異なっている研究もおこなっている。地震の直後にタイ南部被災地で援助物資が被災者に分配されるメカニズムを調査し、またタイ政府の行政対応と日本の援助のあり方を批判的に解明している。“Matching Goods and People: Aid and Human Security After the 2004 Tsunami”*7 と「スマトラ沖地震による津波災害の教訓と生活復興への方策：タイの事例」*8 は、エンジニアリングが主流となっている災害対策研究に、地域研究の視座から新風を吹き込んだものといってよい。もうひとつは、東南アジア諸国自身が最近援助を供与しはじめた過程や要因を解明しようという研究である。援助受入から供与への変質という視点から、1950年代の日本と今日の東南アジアを比較しているのが、氏が編纂した *The Rise of Asian Donors: Japan's Impact on the Evolution of Emerging Donors**9 である。

地球環境問題の悪化にともない、人類と地域社会の生存基盤の崩壊が強く危惧されるようになっている21世紀初頭の現在、森林資源を含めた多様な資源の利用・管理についての、ローカル、ナショナル、グローバルという重層的なレベルでのガバナンスのあり様の解明が必須の研究課題となっている。このような時代環境を踏まえると、様々な研究分野を越境する飛躍力を持ち、また地域理解だけにとどまることなく、地域に働きかける可能性の解明まで含めた地域研究の確立を目指してきた佐藤氏の業績が、地域研究奨励賞を授与するに全くふさわしいことには多言を要しないであろう。

*1 東京大学出版会, 2002年

*2 Shokado, 2010年

*3 小林誉明・下村恭民(編)『貧困問題とは何であるか』勁草書房, 2009年, P.1~24

*4 明石書房, 2008年

*5 東京大学出版会, 2011年

*6 平野健一郎ほか編『国際文化関係史研究』東京大学出版会, 2013年, P.171~192

*7 *Development in Practice* Vol.20, no.1, 2010年, P.70~84

*8 『地域安全学会論文集』第7巻, 2005年, P.433~442

*9 Routledge-GRIPS Development Forum Studies, 2012年

2013年度
大同生命地域研究奨励賞

椎野 若菜 氏

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授)

略 歴

椎野 若菜(しいの わかな)

1. 現 職 : 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授
〔勤務先電話番号 042 (330) 5670 [直通]、042 (330) 5600 [代表]〕
2. 最終学歴 : 東京都立大学大学院社会科学部研究科
社会人類学専攻 博士課程単位取得退学 (2002 年)
3. 主要職歴 : 1998 年 日本学術振興会特別研究員(DC1)
2002 年 日本学術振興会特別研究員(PD)
2006 年 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
2007 年 同上助教 (職制変更による)
2010 年 同上准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文 :
 - ①「ケニア・ルオ社会における象徴的『家』とその展開」小池誠・信田敏宏編『生をつなぐ家—親族研究の新たな地平』〔風響社, 2013〕
 - ②'The "Group" called the Kenya Luo: A Social Anthropological Profile', Kaori Kawai ed., *Groups: The Evolution of Human Sociality*, [Trans Pacific Pr., 2013]
 - ③『「シングル」で生きる—人類学者のフィールドから』(編著)〔御茶の水書房, 2010〕
 - ④『来たるべき人類学シリーズ セックスの人類学』(共編)〔春風社, 2009〕
 - ⑤『結婚と死をめぐる女の民族誌—ケニア・ルオ社会の寡婦が男を選ぶとき』〔世界思想社, 2008〕
 - ⑥「日本におけるアフリカ研究の始まりとその展開—国際学術研究調査関係研究者データベースを使って」〔『アジア・アフリカ言語文化研究』75, 2008〕
 - ⑦'Movements of the Luo and changes in residential patterns from the second half of the 19th century to the British colonial period and the present age in Kenya's South Nyanza region' 中林伸浩編『東部および南部アフリカにおける自由化とエスノナショナリズムの波及』(H17-19 基盤 A 成果報告書)〔金沢大学, 2008〕
 - ⑧『やもめぐらし—寡婦の文化人類学』(編著)〔明石書店, 2007〕
 - ⑨「ケニア・ルオの生活居住空間(ダラ)—その形成と象徴的意味の変化—」河合香吏編『生きる場の人類学—土地と自然の認識・実践・表象過程』〔京都大学学術出版会, 2007〕
 - ⑩「『寡婦相続』再考—夫亡きあとの社会制度をめぐる人類学的用語」〔『社会人類学年報』29, 2003〕
 - ⑪「寡婦が男を選ぶとき—ケニア・ルオ村落における代理夫選択の実践」〔『アフリカ研究』59, 2001〕
 - ⑫「『コンパウンド』と『カンボン』—居住に関する人類学用語の歴史的考察」〔『社会人類学年報』26, 2000〕
 - ⑬Death and Rituals among the Luo in South Nyanza. [African Study Monographs 18(3-4), 1997]
5. 備 考 : 2005 年 博士 (社会人類学) (東京都立大学)

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

業績紹介

「ケニア・ルオ族のジェンダー論・生活誌・社会誌の相関・統合研究」に対して

紹介者： おうじ 応地 としあき 利明

(京都大学名誉教授)

椎野若菜氏はケニア西部のルオ族社会を主たるフィールドとして、調査と研究を積み重ねてきました。その調査は、外国人研究者の参与調査というレベルを越えて、いわば「日系ルオ人」による往還調査ともよびうるものです。氏を「日系ルオ人」と表現するのは、氏が対面的な二者関係をアメンバー状に増殖・累積させて、ルオ族社会のなかに多重かつ柔軟なネットワークを築き、そのなかで生活し調査していることを指します。その立ち位置は、「日系ルオ人」研究者というのがふさわしいと考えるからです。このように述べると、氏が「ルオ族オタク」と受けとられかねませんが、事実はまったく異なります。

著書・論文のタイトルから窺えるように、氏の調査研究は、ジェンダー論・生活誌・社会誌の3つにまたがっていますが、その研究スタンスは、つぎのように表現できると考えます。ジェンダー論・生活誌・社会誌を各頂点とし、その重心に「日系ルオ人」としての氏が位座する三角形です。氏の研究の独自性は、頂点を個別に照射していくのではなく、重心から3頂点を同時に相関させて研究する点にあります。

これまで氏が集中的に取り組んできたのは、ジェンダー論、なかでも個としてジェンダーが最も尖鋭に表出する寡婦です。しかし寡婦をジェンダー論のなかに封閉するのではなく、その生活誌を描きつつルオ社会のなかで寡婦として「生きること」の実存的な関係性、また社会誌を深めつつルオ社会のなかに寡婦として「あること」の存在論的な関係性という2つの関係性のなかで、寡婦論を展開しています。別の角度からいえば、特定の寡婦を対象とする場合でも、彼女の選択と行動を、個人・家族・社会の3次元からなる生活世界全体のなかで分析し統合する努力が払われていることです。

ここにみられるように、氏の研究に通底しているのは、ジェンダー論・生活誌・社会誌を相関かつ統合的に作品として提示する姿勢です。業績紹介の題目「ケニア・ルオ族のジェンダー論・生活誌・社会誌の相関・統合研究」は、このような氏の研究内容にもとづく要約です。

さらに氏の研究は、学位論文が『結婚と死をめぐる女の民族誌—ケニア・ルオ社会の寡婦が男を選ぶとき』として刊行された2008年以降、あらたな展開を見せています。それは、2つの方向においてです。

1 つは、各頂点からの研究主題の拡大です。ジェンダー論では、寡婦から寡夫・離婚者・非婚者などを包摂する「シングル」への拡大であり、社会誌では、村落から地方都市またナイロビへの展開であり、さらに生活誌では、消費への生業・生産の包摂です。これらを通じて、新たな三角形が大きく創出されていこうとしています。

他の方向は、重心に立つ氏の位座が上方へと転位して、研究視野を拡大しつつあることです。それは、研究における三角形から三角錐への展開とよびうると思います。それによって、ルオ族を基盤としつつ、アフリカの他地域、また日本をふくむアジアとの比較の視座の獲得です。これに関連して、2つのことをつけ加えたいと考えます。

2007年にウガンダ・マケレレ大学を初回として、以後、隔年に日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターで開催されているアフリカ研究の国際シンポジウムです。氏は、そのオーガナイザーの1人として定期開催と運営に注力し、国際的な研究ネットワークの構築と連携研究の展開を目指しています。

また日本でも、氏が中心となって、フィールドワークを個別分野の野外・臨地調査にとどめることなく、異文化理解・交流をめざす超領域的フィールドワークの確立をめざして、その理法・作法・技法をめぐる研究会をたちあげ、成果を叢書として順次刊行する計画が進行中であることです。

2013年度
大同生命地域研究特別賞

中村 尚司 氏

(龍谷大学 名誉教授・研究フェロー、
特定非営利活動法人 J I P P O 専務理事)

略 歴

中村 尚司(なかむら ひさし)

1. 現 職 : 龍谷大学名誉教授、同大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー
特定非営利活動法人 J I P P O 専務理事
〔勤務先電話番号 075 (371) 5210〕
2. 最終学歴 : 京都大学文学部史学科西洋史専攻 (1961年)
3. 主要職歴 : 1961年 アジア経済研究所研究員
1965年 セイロン大学留学 (~1969年)
1984年 龍谷大学経済学部教授
2002年 同大学社会科学研究所教授
2007年 同大学名誉教授および研究フェローに就任
2008年 NPO 法人 J I P P O 専務理事就任
現在に至る
4. 主な著書・論文 :
 - ①『越境するケア労働者』(分担執筆)〔日本経済評論社, 2010〕
 - ②『参加型開発—貧しい人々が主役となる開発に向けて』(共著)〔日本評論社, 2002〕
 - ③『海外職業訓練ハンドブック—スリランカ』〔財団法人海外職業訓練協会, 1994〕
 - ④『人びとのアジア』〔岩波書店, 1994〕
 - ⑤『地域自立の経済学』〔日本評論社, 1993、第2版, 1998〕
 - ⑥『豊かなアジア、貧しい日本』〔学陽書房, 1989〕
 - ⑦『スリランカ水利研究序説』〔論創社, 1988〕
 - ⑧『地域と共同体』〔春秋社, 1980／増補版, 1987〕
 - ⑨『共同体の経済構造』〔新評論, 1975／増補版, 1983〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
5. 主な社会的活動 :
 - ・ 国際協力事業団派遣専門家
 - ・ 青年海外協力隊講師、機関誌での連載講座
 - ・ 海外技術者研修協会講師
 - ・ 国際協力銀行の受託調査
 - ・ 国際協力機構スリランカ国別支援委員会委員
 - ・ トヨタ財団助成研究選考委員長
 - ・ 福岡アジア文化賞選考委員
 - ・ シンハラ語法廷通訳

以上のほか、国内外で幅広く活動中
6. 主な受賞 : 1986年 総合研究開発機構(NIRA) 東畑賞
1998年 国際協力機構(JICA) 国際協力功労者表彰
7. 備 考 : 1979年 農学博士(京都大学)

業績紹介

「南アジアにおける地域自立の経済学研究と広汎な啓発活動への貢献」に対して

紹介者： おおつか 大塚 りゅうたろう 柳太郎

(自然環境研究センター理事長)

中村尚司氏は、京都大学文学部史学科を卒業した 1961 年にアジア経済研究所に採用され、スリランカと南インドを主たる対象とする農村経済の研究を開始されました。1965 年から 1969 年までの 3 年数カ月にわたる調査が、同氏の研究の視座・方法論に大きく影響したようです。当時、アジアの地域社会を対象とする経済学をはじめとする社会科学の研究では、日本を含むアジアの研究者が西欧で発展した分析枠組みに固執しており、実態の把握にも地域社会の発展にも弊害になっていることを見抜いたのです。同氏は、地域社会に学ぶという基本姿勢を保持しながら、学界の動向にも鋭敏で、エントロピー論に基盤をおく経済学、とくに「生命系の経済学」を展開したポール・エキンズや、後に「エコロジー経済学」を提唱するハーマン・デーリィらの理論に共感し、玉野井芳郎（故人）、槌田敦、室田武らと交流しています。また、アジア地域でフィールドワークを展開していた鶴見良行、村井吉敬（ともに故人）らと、共同研究を含め親交を深めています。

中村氏は、南アジア農村部における広汎なテーマにかんする研究成果を、日本社会との比較の視点を重視しながら、論文はもとより多くの単行本として著しています。最初の大部の成果として挙げられるのは『共同体の経済構造』（1975）です。また、スリランカにおける灌漑農業の発展を古代から現代まで辿り、水利資源の過剰開発が農業の荒廃をもたらすことを自らのデータから証明したのが『スリランカ水利研究序説』（1988）です。さらに、スリランカと南インドの調査を踏まえながら、アジア地域における経済問題と共同体の経済システムについてまとめたのが、『地域と共同体』（1980、増補版 1987）と『豊かなアジア、貧しい日本』（1989）です。多くの含蓄に富む指摘がなされていますが、たとえば『豊かなアジア、貧しい日本』で、フィールドワークを行う研究者に多くみられる当事者性の欠如が鋭く指摘されています。

中村氏のもう一つの大きな業績は、民際学を提唱したことにあります。氏が強く意識していたのは、19 世紀以降の社会科学に根深く存在する近代国家の枠組みと主観・客観の峻別を乗り越え、研究者の当事者性を重視することです。民際学の第 1 の特徴は、参加型研究としてのフィールドワークに立脚することです。第 2 の特徴は、成果をフィールドワークの対象である地域住民に役立てる一人称・二人称の科学ということ。第 3 の特徴は、人間生活における循環性・多様性・関係性を重視し現実の全体的な問題と格闘することです。民際学は、龍谷大学大学院経済学研究科に 1994 年に研究コースとして開設され、2009

年から研究プログラムになっています。同氏の民際学を視座とする研究の成果は、『地域自立の経済学』（1993、第2版 1998）と『人びとのアジア』（1994）にまとめられています。

中村氏は、研究者・教育者として活躍する一方で、社会的な活動を幅広く行ってこられました。国際協力事業団の研修員の指導、青年海外協力隊訓練所での講義や機関誌での連続講座、海外技術者研修協会での講義、市町村国際文化研修所での講義、国際協力銀行の受託調査、トヨタ財団の助成研究選考委員長、福岡アジア文化賞選考委員などがあげられます。国際協力事業団とコロンボ大学との研究協力事業では、1998年から2001年までチームリーダーを務められました。国際開発高等教育機構の海外フィールドワーク研修では、2001年度にASEAN基金支援コースのディレクターとしてインドネシアでフィールドワークを実施し、熊本県でワークショップを開催されています。また、コロンボ大学、南アフリカ共和国のステレンボシュ大学、メキシコのコレヒオ・デ・メヒコ大学などで、国際交流基金の派遣教授として講義をされています。さらに、キューバ共産党に招かれ、ハバナのアジア・オセアニア研究所において集中講義を行うとともに、同国が大国の影響を受けながら経済自立を目指した経験について調査も行っています。2001年以降は、スリランカで発生した内戦の非暴力的解決に向け、参加型研究の立場を重視し精力的な取り組みを展開されてこられました。

中村氏は、23年間に及ぶ龍谷大学教授としてだけでなく、多くの団体の活動に積極的に関わる中で、若い人びとの育成に尽力され、市民向けの講演などにも熱心に取り組んでこられています。最近の海外での活躍の一例として、スリランカのペラデニヤ大学で本年3月に開催された“Conference on Sri Lanka-Japan Collaborative Research”で、キーノート・スピーチをされたことも挙げられます。

中村尚司氏が、地域研究者として多くの業績を挙げられ、日本と隣国であるアジア諸国との交流の促進と民際学を中心に据えた社会啓発に果たした貢献は、大同生命地域研究特別賞に相応しいものと高く評価されます。